



特集
辞書指導と語彙指導



辞書指導,これだけは教えておきたい



佐藤 哉二

本誌38号（特集「辞書指導を考える」）で私は次のように書いた。「生徒が辞書を引く目的は何か。考えるまでもなく、それは『単語の意味を知するため』であろう」。そして、単語の意味を知り、語法も自分で検索できるようになれば入門期の辞書指導は任務完了となろう、と書いた。が、その先の課題としてたとえば、辞書の用例に載っている The plant died from want of water. のなんでもない1文がコンテキストによっては聞き手を責めていることにもなるということを生徒に気付かせる、そういう指導も必要だろうとまとめた。

辞書指導どころか、教科書を味わいながら読む時間さえないのが現状だろう。しかし3年間の英語学習というスパンで考えると、初期段階で辞書の引き方を教えておくのは効果的である。限られた総時数のなかでせめてこれだけは教えておきたいということを挙げてみたい。

■「この辞典の使い方」の通読を

生徒は辞書の約束事を案外知らないのではないだろうか。どの辞書にもそれぞれの約束事があり、「使い方」が細かく記してあるので、「読んでおけ」ではなく、骨子だけでも生徒といっしょに読んでほしい。

重要語のランク表示、派生語、語形変化、多義語、語義の重要度、コロケーションや成句の扱い、分離複合語など、その項目を追うだけでも、生徒は「辞書は単語の意味を調べるもの」という豆単式発想を修正するだろう。

「この辞典の使い方」に1時間は割きたいけれ

ど、それが無理なら20分でもよい。こんな情報が詰まっているのだと生徒が認識することはそれからの英語学習に大いにプラスとなるはずである。

■[] や「」の意味

記号の約束ごとで意外に理解されていないのが交換可能部分の表示法であろう。

『ジーニアス英和辞典 第4版』（以下G4）で play の例を見てみる。

play innocent [ignorant] 何食わぬ顔をする
この場合 [] 内の語は直前の1語と交換可能で、2通りの句は意味が同じである。

play 「in goal [as goalkeeper] ゴールキーパーをする

2語以上の場合には交換の起点を「で示し、日本語が1つであるからやはり意味は同じである。

交換される語が複数あり意味が異なる場合は次のように表示される。

play doctor [war, school] お医者さん[戦争, 学校] ごっこをする

この言い換え可能の書式は、語義の日本語、用例の日本語訳でも同じである。

play along [自] 協力[賛成]する(ふりをする)

まれに別々の個所が重なってしまうことがあり、生徒には煩雑と思えるかもしれないが、読み方は同じである。

give [allow] full play to one's ability [abilities] 能力を十分に働かせる

訳語が1つなので、どの組み合わせも可能なのだ

とわかる。

ちなみに（ ）が省略可能を表すことは理解されているようだ。

紙幅の都合で詳しく例をあげられないが、G4では〔 〕はコロケーションを示している。

〈曲・音楽〉を〔楽器で〕演奏する〔on〕
〔 〕の日本語と英語が組になっている。

このような約束ごとは出版界で統一されたものではなく辞書により異同があるので、各種の辞典が並ぶ教室では初期の指導で教えておきたい。

■選択制限

選択制限とは主語に「物」が使えるとか、目的語に「人」が使えるなどの情報で、たとえばOALDは「人」にはsb, 「物事」にはsthを採用している。G4では〈人〉〈物〉〈事〉の3つに分けているが、これで日本語に引きずられることを避けられる。

challenge ㊦②〈人が〉〈人〉に〔試合などを〕挑む〔to〕

日本語では「アルプスの壁に挑む」「論争を挑む」など、目的語に人以外が可能だが、英語ではそれができないことを〈人〉が示している。生徒は単語の意味だけを知りたがり、語彙数の不足を心配するが、このような選択制限に敏感になることで言語の運用能力が高まることに気付かせたい。

なお、〈人〉には人が働く有機体も含まれることは機会をとらえて教えておきたい。

spend ㊦①〈人が〉〈金額〉を〔物に/…するの〕に〕使う〔on, in, 《主に米》for / doing〕

spendの用例としてOALDはThe **company** has spent thousands of pounds updating their computer systems.を載せている。会社などの組織体も〈人〉なのである。

■原義・基本義

日本語では「鱈」は読めなくても魚の一種だと高校生にも見当がつく。英語ではそうはいかな

い。abuseを単語カードに「虐待する」と書いて覚えるのは苦痛である。そのような時に原義・基本義に目を通すように指導したい。

abuse 【原義: (本道から) 逸脱して (ab) 用いる (use)】

ab+useならuseは知っている。abが「逸脱」を表すことを知ればabnormalに思い至る生徒もいよう。さらに接頭辞のab-まで引いてみる生徒も出てくるに違いない。

基本義については、もう紙幅がないので例をあげないが、breakなどを参照されたい。

■コロケーション

英文を読んでいてわからない単語に出会うと、生徒はそこでいったん読むのを止めて辞書に手を伸ばす。たとえば“No other organ”とあると、organを調べようとする。

organ ①器官；臓器。②オルガン。③機関、組織。④機関誌〔紙〕。

引いた単語にはたいてい3つか4つくらいの語義があるが、どの語義かを決める手だては実は文中にあるものだ。

No other organ in the history of life is known to have grown as fast as the brain.
このlife, brainから関連語の①を選ぶ。自分の思い込みを排する辞書の引き方も教えておきたい。

コロケーションや語と語の緊密な結びつきは用例にも盛り込まれている。たとえば

In one experiment, subjects were kept awake continuously for 72 hours.

という英文中のexperimentとsubjectはG4のsubject ㊦③の用例に

the subjects of an experiment 実験の被験者の形で載っている。成句でも慣用句でもないこのようなコロケーションの蓄積も大切であることを教えておきたい。

(さとう さいじ・『ジーニアス英和辞典』編集委員)